

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K20570

研究課題名（和文）持続可能な開発指標（SDGs）と地域住民を含んだ観光まちづくり：首里景観形成地域

研究課題名（英文）SDGs and Community based Tourism and City Planning: Shuri Land Formation Area

研究代表者

宮国 薫子（Miyakuni, Kaoruko）

琉球大学・国際地域創造学部・准教授

研究者番号：10300500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：一つ目の研究は、沖縄県、首里における地域住民の観光に対する態度を、経済、社会や文化、自然環境についての正と負の影響、コミュニティへの帰属意識についてアンケート調査した。その結果、観光の経済、社会や文化、自然環境における正の影響を地域住民は、感じていること、観光の経済、社会や文化、環境への負の影響については、交通渋滞や交通事故への懸念が大変強いことがわかった。

二つ目の研究は、新たな観光の枠組みである観光リンケージを通して観光まちづくりを検証することであった。欧米（ボストン、ブリストル）における構造物のリンケージやカタリナ等の交通のリンケージを視察して首里の観光まちづくりの在り方を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「地域住民の観光に対する態度」の研究は、持続可能な観光まちづくりを行う上で重要なリサーチ分野として世界でも確立されてきている。沖縄県ではますます観光が発展し、特に注目されている首里城近辺のような地域と観光地が隣接するデスティネーションで、この研究を行うことは、今後、持続可能に地域が発展するうえで、重要である。また、地域における影響に加えて、観光デスティネーションの枠組みである「観光リンケージ」を、地域にあてはめることによって、観光まちづくりをSDGsも含めて計画することが可能になる。

研究成果の概要（英文）：This research comprises two different kinds of research. The first research is residents' attitudes toward tourism focusing on the neighborhood of Shuri (Shuri Formation Area, Ryutan Formation Area) in Okinawa prefecture. Research on Residents' Attitudes toward tourism has been considered as a foundational research for sustainable tourism since the 1960's.

The second research is application of Tourism Linkage framework (Miyakuni and VanderStoep, 2006) to the area. This research showed the need and urgency of establishing physical linkage and transportation linkage, the improvement of information linkage, interpretation linkage, and economic & promotion linkage. From the field research of Boston (freedom Trail), Santa Fe, Briston, and Catalina Island, An appropriate model of Tourism linkage for sustainable tourism development has been suggested.

研究分野：観光

キーワード：観光まちづくり 持続可能な観光 地域住民 観光がもたらす影響 オーバーツーリズム Residents
Attitudes SDGs 観光リンケージ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

沖縄県の首里城近辺には、1990 年後半に首里景観形成地域や 龍潭景観形成地域が指定され、首里城を囲む美しい街並みが形成されてきている。沖縄県においては、2019 年に、過去最高の観光客数 10,004,300 人¹⁾を記録したが、2019 年 10 月に首里城が焼失し、観光や地域住民は心理的に大きな打撃を受けた。その後、2020 年 1 月には、新型コロナウィルスが猛威を振るい沖縄県の観光客数は激減したが、2024 年の 6 月現在、コロナ前の状況に戻りつつある。持続可能な観光への基礎的な調査として、住民の観光に対する態度の研究が、1960 年代より世界各地で行われてきている。1960 年代、70 年代には、観光の先進地であるハワイや地中海で観光が地域に及ぼす様々な影響について調査され、1980 年代には、観光地の共同体に焦点を当てた研究が²⁾、1990 年代より、地域住民の観光に対する態度(姿勢)を説明するモデルの構築とその実証研究が、多くの観光研究者の間で試みられて来ている³⁾。世界中の観光地で観光の経済的な正の影響や観光の自然や社会的な負の影響が論じられ、近年では、それらが体系的に整理されてきた。2010 年代になり、人気のある観光地に多くの観光客が殺到し、地域における観光の負の影響が誰の目にも顕著となり、オーバーツーリズムという言葉が一般化した。沖縄県の首里城近辺も、観光客が増加するとともに、観光客が SNS 情報や位置情報システムを駆使して、地域の隅々まで進出し、レンタカーで狭い小道や住宅街の片道一車線の道路を高速で走り抜ける被害が起きている。

2．研究の目的

首里地域では、伝統や緑の多い静かな環境を大切に思っている住民が多いと言われているが、発展する地域の観光と観光客の増加に対して、どのような感じを受けているだろうか。本稿の問いは、首里城近辺の地域住民が観光に対してどのような影響(経済的な影響、社会文化的な影響、自然環境への影響)を感じているかである。

3．研究の方法

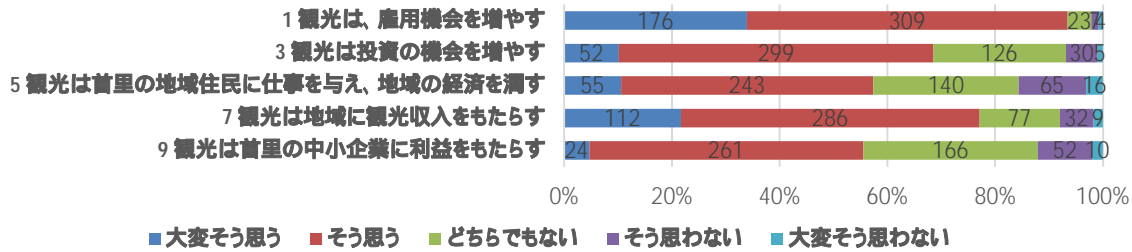
本稿の研究方法はアンケート調査である。調査期間は、2021 年 3 月から 2022 年 3 月までである。調査対象は、沖縄県首里の首里城を中心とするデスティネーション(首里城や龍潭池、中城御殿跡や、それらを含む龍潭景観形成地域や首里景観形成地域を囲む東西 300 メートル以内の地域)である。地域の選定にあたっては、那覇市都市計画課に協力依頼をし、入手できた住宅地図を利用し、アンケートを配布する範囲を設定した。アンケート調査の方法としては、調査員(5 名)が、2 軒に 1 軒を訪ね、一週目に調査票を配布しアンケートの意義と内容を説明、2 週目に回収する方法で行われた。600 件の配布中、522 件回収し、回収率は、87%という高い回収率となった。アンケートの質問は、選択式が 70 問、記述式が 5 問あり、筆者が 2012 年に行った西表島における 1000 世帯を対象としたアンケート調査の質問をもとに、首里地域に合わせて、共同体の意識に着目した質問を 2 件、追加した。アンケート調査すべてに回答したインセンティブとして被験者に抽選で 20 名に大学のロゴ入りペンを郵送することにした。

4．研究成果

(1) 観光が地域へもたらす正の影響

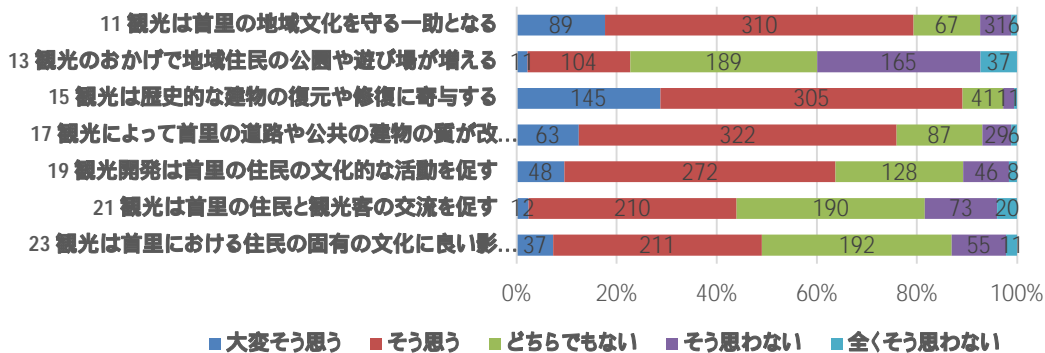
図表 1 は、観光が経済にもたらすプラスの影響を示している。地域住民は、観光がもたらす正の影響である「観光は雇用機会を増やす」に対しては「大変そう思う・そう思う」と回答した人が 90%以上、「観光は投資の機会を増やす」、「観光は地域の住民に仕事を与え経済を潤す」、「観光は地域に観光収入をもたらす」等に関して、「観光は首里の中小企業に利益をもたらす」の全てにおいて、「大変そう思う・そう思う」が 50%以上を超えており、観光の経済におけるプラスの影響を強く感じていることがわかった。

図表1 観光が経済にもたらす正の影響 (N = 522)



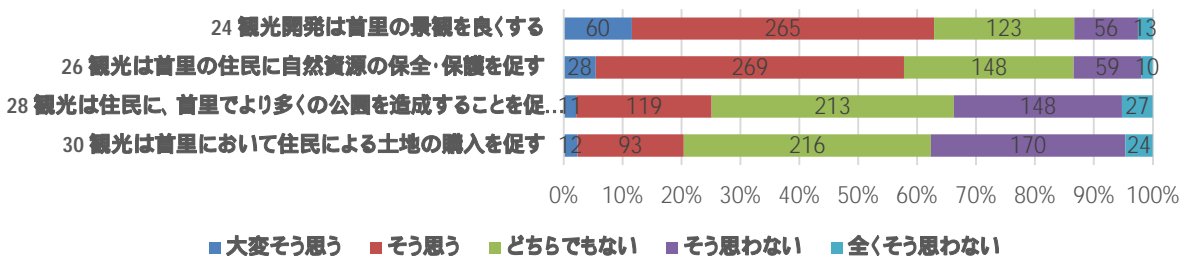
図表2は、観光が社会や文化にもたらす正の影響を示している。「観光は地域文化を守る一助となる」、「観光は道路や歴史的な建物の修復に寄与する」「道路や公共の建物の質が改善される」「住民の文化的な活動を促す」などの4つの質問において、「大変そう思う・そう思う」が60%以上をこえており、「住民と観光客との交流を促す」に対しては、42%が「大変そう思う・そう思う」と答えている。おおむね観光が社会や文化にもたらす正の影響を感じているといえる。一方、「観光のおかげで地域住民の公園や遊び場が増える」は20%強あるが、「そう思わない、全くそう思わない」と答えた人が40%である。地域の住民にとっての地域資源の活用という面では、たいして良い影響を与えてないようである。

図表2. 観光が社会や文化にもたらす正の影響 (N=522)



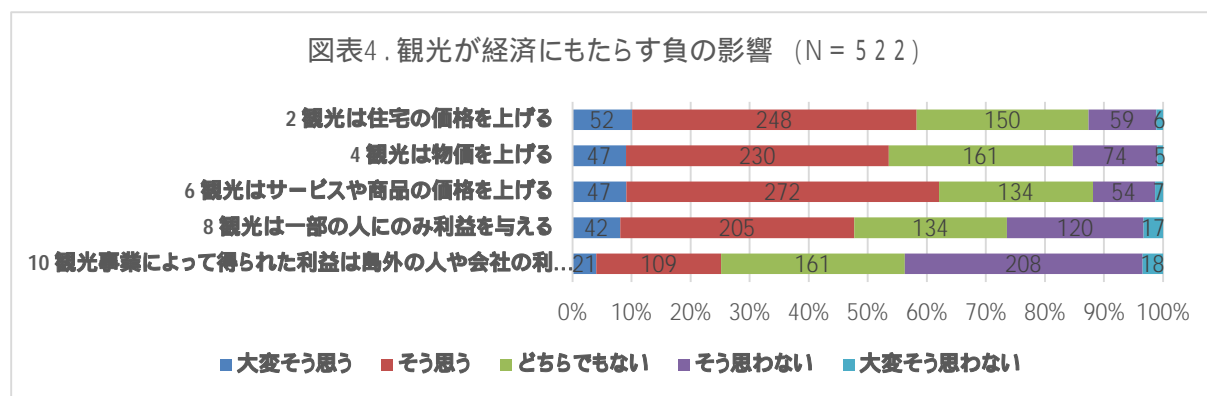
図表3は、観光が社会や環境にもたらす正の影響を示している。4問のうち、「観光は首里の景観をよくする」や「観光は住民に自然資源の保護・保全を促す」という質問に対しては、50%以上が「大変そう思う・そう思う」と答えている。しかし、「観光は、より多くの公園を造成することを促す」や「観光は、住民に土地の購入を促す」に対しては、70%以上が、「そう思わない、全くそう思わない」と答えている。

図表3. 観光が環境に与える正の影響 (N = 522)

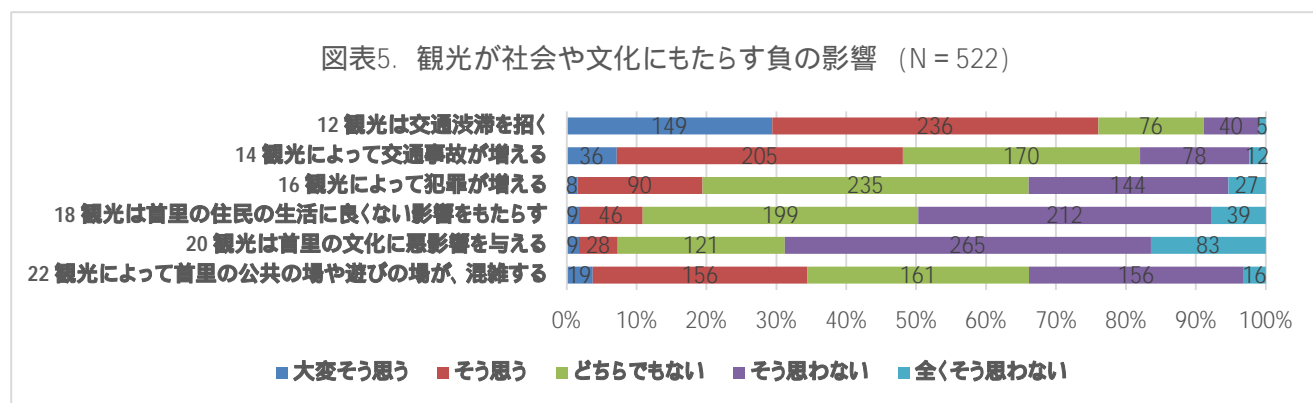


（２）観光が地域へもたらす負の影響

図表４は、観光が経済にもたらす負の影響を示している。「観光は住宅の価値を上げる」、「観光は物価を上げる」、「サービスや商品の価格を上げる」に対して「大変そう思う・そう思う」と答えた人が50%以上、「観光は一部の人にのみ利益を上げる」が45%以上いた。しかし、「観光事業によって得られた利益は、島外の人や会社の利益にしかない」という意見に対しては、「大変そう思う・そう思う」が30%未満であった。このことから、観光の負の利益についても、ある程度、認識されていることがわかるが、観光から得られる利益については、広く地域に行き渡ると感じていることを表していると考えられる。

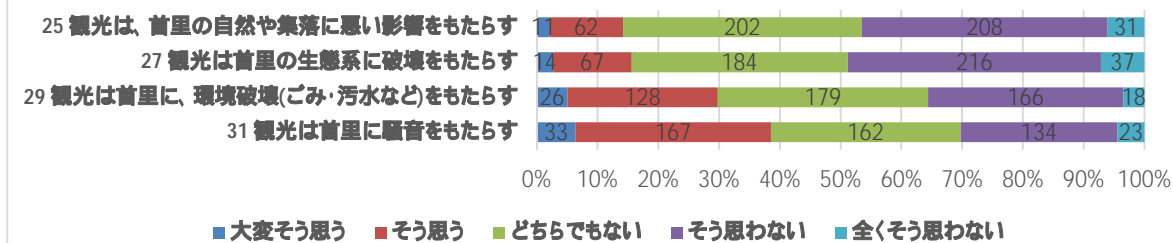


図表５は、観光が社会や文化にもたらす負の影響を表している。「観光は交通渋滞を招く」に「大変そう思う、そう思う」と答えた人73%、「観光によって交通事故が増える」が44%、「大変そう思う・そう思う」と答えており、交通面での懸念が著しく見られた。それに対して「観光によって犯罪が見られる」、「住民の生活に良くない影響をもたらす」、「文化に悪影響を与える」に関しては20%以下が「観光によって公共の場や遊びの場が混雑する」に関しては33%が「大変そう思う・そう思う」と答えている。この調査では、観光の負の影響について記述式でも聞いているが地域の交通に関する苦情が多々見られた。



図表６は、観光が環境にもたらす負の影響を表している。「観光は首里に騒音をもたらす」が38%、「観光は首里に環境破壊（汚水・ごみ）をもたらす」は29.5%が「大変そう思う・そう思う」と答えているが、「そう思わない・大変そう思わない」と答えている人々もそれぞれ30%、35%いる。一方、「観光は、首里の自然や集落に悪い影響をもたらす」、「観光は首里の生態系に破壊をもたらす」には13%が「大変そう思う・そう思う」と答えている。むしろ、48%が「そう思わない・大変そう思わない」と答えている。全体的に見て、観光が周囲の自然環境に悪影響を与えていると感じていないことがうかがえる。

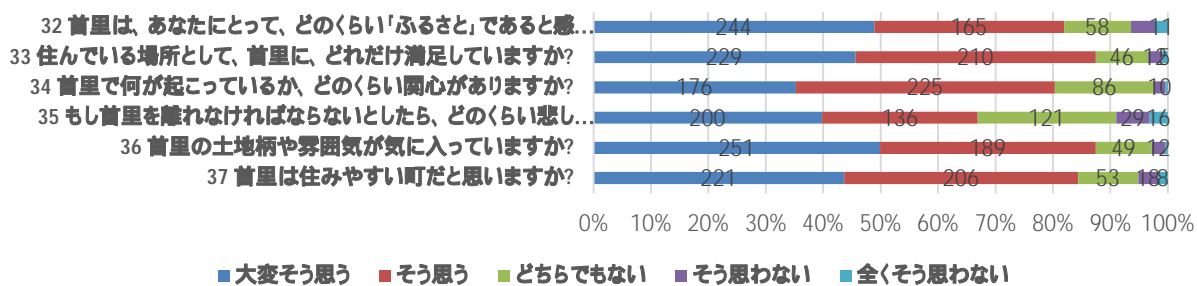
図表6. 観光が環境に与える負の影響



(3) 住民の地域への帰属意識

地域住民の地域への帰属意識 (Community Attachment) は、図 7 に示している。「あなたにとって、首里をふるさとだと感じる」が 78%、「住んでいる場所として満足している」が 84%、「首里で起こっている出来事に関心がある」が 76.9%、「首里の土地柄や雰囲気が入っている」という設問に対して「大変そう思う・そう思う」が 84%あった。「首里を離れないといけなくなると悲しい」についても「大変そう思う・そう思う」が 64%あった。「首里は住みやすい町だと思う」についても 81%であった。このように地域への帰属意識や思い入れは強いと言えるだろう。

図表7. 地域への帰属意識



本研究では、沖縄県、首里における地域住民の観光に対する態度を、経済、社会や文化、自然環境についての正と負の影響、コミュニティへの帰属意識についてアンケート調査した。その結果、観光の経済、社会や文化、自然環境における正の影響を地域住民は、概ね感じていること、観光の経済、社会や文化、環境への負の影響については、特に、交通渋滞や交通事故への懸念が大変強いことがわかった。この調査によって、首里の地域住民は、観光の発展について、おおむね賛同しているが、地域資源の利用や、交通面での安全性など、地域の意向を丁寧にくみ取り、対策を立てていかなければ、持続可能な観光の発展にはつながらないだろう。ハワイの DMO (HTA) では、住民の観光に対する態度の調査が定期的に行われ、結果がホームページで公表されている。2012 年に、同様の調査を筆者が西表島で行い、沖縄県でも 2018 年に行われたが、まだ特定の観光目的地で定期的に行っていない。一口に、沖縄の観光といっても沖縄県には様々な観光目的地 (デスティネーション) が確立してきており、それぞれの観光目的地によって特徴や課題が異なる。デスティネーションについては、国全体、市町村全体という地理的区分や行政による区分、行政区分とは関係なく有機的に広がった観光地、テーマパーク、リゾートなど様々なスケールでの捉え方がある⁴⁾。しかし、特に観光地と地域の暮らしが隣接しているような観光地では、観光地の地域住民が、どのように感じているかを定期的に行うことによって、その地域の現状と課題が明確になり、それらへの対策を行うことで持続可能な観光を推進することができるだろう。

【参考文献】

- 1) 沖縄観光に関する統計・調査資料 adnrrn2okinawakannkounikannsurutoukeichousashiryou.pdf 2021 年 9 月 27 日閲覧
- 2) Rothman, R. A. (1978). Residents and transients: Community reaction to seasonal visitors. Journal of Travel Research, 16(3), 8-13.
- 3) McGehee, N. G., & Andereck, K. L. (2004). Factors predicting rural residents' support of tourism. Journal of Travel Research, 43 (November), 131-140.
- 4) Mason, P.(2021). Tourism Impacts, Planning and Management, 4th ed, Routledge, 194-195

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮国薫子	4. 巻 36
2. 論文標題 持続可能な観光における基礎調査：首里・龍潭景観形成地域における地域住民の観光に対する態度の研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集 Proceedings of JITR annual conference	6. 最初と最後の頁 60 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮国薫子	4. 巻 35
2. 論文標題 観光リンクージと持続可能な開発指標(SDGs17)からみたヘリテージ・トレイル・ツーリズムの可能性：首里城周辺から始まる「東御廻り(あがりうまーい)」の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集 Proceedings of JITR annual conference	6. 最初と最後の頁 165 168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 宮国薫子
2. 発表標題 持続可能な観光における基礎調査：首里・龍潭景観形成地域における地域住民の観光に対する態度の研究
3. 学会等名 日本観光研究学会 第36回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮国薫子
2. 発表標題 観光リンクージと持続可能な開発指標(SDGs17)からみたヘリテージ・トレイル・ツーリズムの可能性：首里城周辺から始まる「東御廻り(あがりうまーい)」の事例
3. 学会等名 日本観光研究学会 第35回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kaourko Miyakuni
2. 発表標題 Tourism and Sustainable Development Goals (SDGs): Creating regulations for electric tour buses in Yambaru National Park in Okinawa Prefecture, Japan
3. 学会等名 ICOT2020 (International Conference for Tourism Policy) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>持続可能な観光における基礎調査：首里金城町景観形成地域の事例 www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~kaorukom/shuri</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------